

山と博物館

第 6 卷 第 7 号

1961年6月25日



モリアオガエルの産卵

撮影 長沢武氏

大町山岳博物館

お山の昆虫記

福島 融

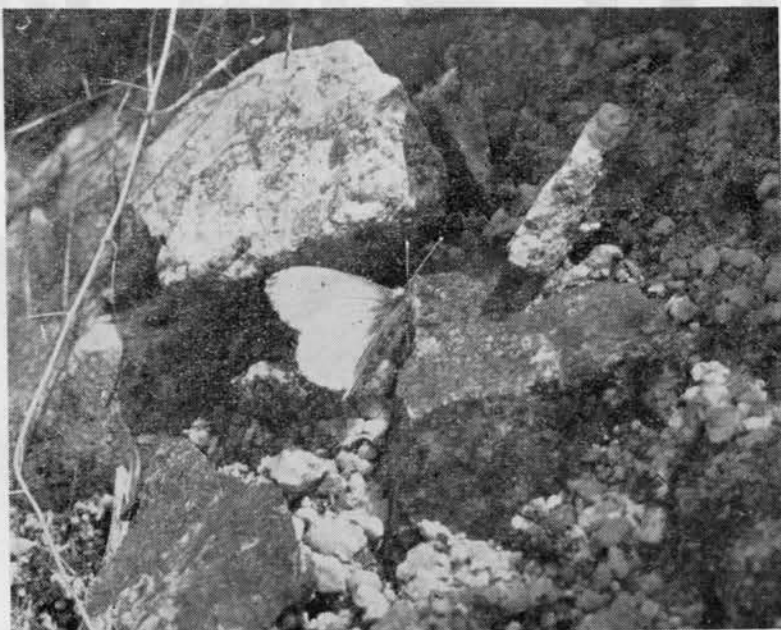
「昆虫記」などと生意気なタイトルをかゝけてファール大先生の「昆虫記」を気取ったようで面映いだが、そんな大それたつもりはサラサラ持ち合せていない。たゞ、編集部のお達し通りに従ったまゝである。

さて、こゝで「山」という特殊な環境を指定されたがこれは勿論海拔2400~3000mクラスのいわゆる「高山帯」を指すものと思われるので、主として私のホームグラウンドである後立山連峯（白馬岳~烏帽子岳）の登山路で見かける昆虫について雑談風書き綴ってみたいと思う。

私は小学生時代から虫好きで蝶トンボ、カブト虫など手当たり次第に採集しては彼等を噛み合せたり、無惨にもそのまゝ虫ピンで折箱の中へ刺し止めてはコレクションの増えゆくのを眺めながら悦に入っていたが、成長してもその醍醐味が忘れられず、採集範囲は遂に高冷で険険な高山地帯にまで及んだ。

大体一人前の大人がいい年をして捕虫網を振りまわしながらとび歩いている恰好はどうひき目に見てもスマートとは言いがたい。まさに慢画映画を地でゆく図である。しかしそのような珍妙な恰好を敢てしてまでも追いかけてみたいと願うのが高山蝶研究の魅力であろう。彼等の祖先をたずねれば遠く氷河時代にさかのぼるといわれ、いわば氷河期の「忘れもの」としてとり遺され寒冷高瘦の高山に閉じこもって今まで生きながらえて来たのである。そのうら付けとして富士山の事実があげられるこの山は昔、活火山として盛んに活動していたが漸次、休火山に移り現在に至ったもので比較的「新しい山」であるため3,777mもの標高を持ちながら高山蝶は一匹も棲息していないのである。すなわち富士山では火山時代に生物は一旦絶滅してしまい休火山になってから再び生物が棲みついたと推測出来る。だからその以前からいた氷河時代の蝶である高山蝶はいないわけである。北アでこの高山蝶と呼ばれているものは5科10種類ありそのうち、後立山では3科6種類にすぎない。その中から二、三拾ってみよう。

クモマツマキチヨウ



クモマツマキチヨウ（倉田稔氏写）

この蝶と後立山は因縁が深い。なぜなら明治43年7月18日に爺ヶ岳南方の棒小屋乗越（2400m）でわが国最初の本種雌一頭が記録されたからである。この報告は当時、蝶類研究家の間で大変な話題を呼んだようで彼等の研究雑誌「ゼフィルス」創刊号の巻頭をこのクモマツマキの色刷グラビアで飾った程だった。

その清楚な美しい姿は高山蝶の代表として恥じないものだが、最近の調査によると高山よりもむしろ標高1000mぐらゐの森林帯の谷や、沢筋に比較的多く、雪どけの姫川谷では400mの低地でも発見されている。彼等は、モンシロチョウの仲間では大きさは一廻り小さく、雄と雌との色彩が全々違っている。雄は前翅の先端が美しい橙黄色にいろどられるが、雌ではその部分に黒い条斑があるにすぎない。

後翅は白色だが裏面は雌雄共に濃い草色の雲状の斑紋をよそおい、表面からも透視出来る。幼虫の食べ物はミヤマハタザオというアブラナ科の植物で、母蝶はこの花穂に一卵あて産卵し、ふ化した幼虫は花や果実を食べて約一カ月で蛹になり、そのまま越冬する。私は最初この習性を知らずミヤマハタザオの葉に産卵されたものを沢山採集してきて、飼育したところ羽化した蝶はなんと普通のスジグロチョウだったという大失敗を演じた苦い経験を持っている。

タカネヒカゲ

7～8月初旬にかけて縦走路に見かける極く地味な淡褐色の蝶で歩いているときなど足もとから、ヒラヒラ飛び立つのに出合うだろう。そしてほど近い砂礫の上に舞い下りる彼等を観察すると、面白い習性が発見出来る。それは、風が吹くとその方向にむかって地上にとまり、羽を合せて体を右に横倒しにする奇妙なしぐさである。そして又、羽の模様が何と環境にマッチしていることかと驚くだろう。全く完璧な保護色なのである。有名な高山蝶の研究者T氏によると、タカネヒカゲは三年目に成虫になるといわれる。すなわち幼虫で二冬越冬するわけであるが高山の気象のきびしいかを物語る事実である。なお幼虫の食草はヒメスゲというイネ科の植物である。

ミヤマモンキチヨウ

普通のモンキチヨウの親類であるが、タカネヒカゲと同じく高山性の強いものである。やはり7月下旬～8月一ぱい縦走路で見かけるが、活動が活潑でなかなか敏しょうである。

後立山では鹿島槍冷池以南にのみ発見されており、いまだにそれ以北の山からの記録がない。この種は浅間山にも産するが北アのもは翅の外縁にある黒帯がせまいので、前者と区別され一名アルプスモンキチヨウともいわれる。幼虫の食草はクロマメノキという高山植物である蝶の次にはトンボとくるところがどうも世間一般の昆虫に対する常識的序列らしいが、トンボは蝶のように高山蜻蛉というはっきりした区別がない。しかし最近A博士によって3科9種類をわが国の高山蜻蛉として提唱された。そのうちから後立山で見られるものを二つ程紹介しよう

ルリボシヤンマ

ヤンマの仲間では腹部の長さが5%に達する大形のもので黒褐色にルリ色の斑紋をよそおった美しい種類である。同類にオオルリボシヤンマがあり混飛している。尾根筋にある沼池にはどこでも見られ、白馬大池、八方池、冷池、種子池などに多い、よく早朝洗面などの際池端の水草などに静止しているのや、羽化しているのなどを見かける。又、夕陽に映えてそびえ立つ山々を映した池面をゆったり滑走している姿はなかなか貫録がある。

カオジロトンボ

赤トンボの仲間では小形の黒色種であるが雌は頭部全面が純白で雌は黄色である。又、胸部と腹部の界には明瞭な赤橙色の斑紋をもつ可愛い種類である。産地としては前種より局部的で、八方池、神の田圃、天狗原、など北部に片寄っている。

カワゲラニミ

カワゲラといってもあまり御存知ではないと思うが、登山に関係のあるものを二つ程素描してみよう。

セッケイカワゲラ(一名セッケイムシ)

これは翅のない特殊なカワゲラで雪上を好んで生活している変りものである。6～7月の晴れた日の白馬の大雪山などで、雪上を活動しているのを発見することが出来る。又、冬山のテントサイトなどで、よく晴れた日に

無数の本種を雪上に見ることがある。体長は1%程の黒い細長い虫である。

トワダカワゲラ

これも無翅のカワゲラで有名なものだが、体長は2%内外、体はほかのもののように扁平でなく円筒形である。棲家は標高2000m辺の溪流で水温があまり変化しないところ(20°C～12°C)を好んでいる。後立山の沢筋にはどこにも見られ、高所では白馬お花畑の溪流や、針の木のマヤクボ辺、又、低い所では黒菱の馬止めの沢で発見されている。キャンプの時や小休止の際、手近な溪流の石や落葉をはがしてみればきっと彼等の幼虫に逢えるだろう。

以上のものはすべて高山をアジトとして棲息しているもので低地に移され、生活営み故郷の山を思いこがれて、敢然と妥協を拒否しつづける純粋な高山族であるが、次にあげる虫は平地で極く一般に見られるものでその旺盛な生活力は植物の雑草にも等しく、高山の厳しい生活条件にもびくともせず、平気で棲息しているものである。

クロバエ

大形のハエで畜舎附近に多いが、山にも多く、山小舎、テント場、などに群がっているのはほとんどこれである山でべんとうなどを開けていると、かならずどこからともなく飛んで来て、悩まされる経験は誰でももっていることだろう。私もこの虫にまつわる嫌な思い出をもっている。それはある遭難者の遺体を収容に行った際、ランクルフトに落ちこんでいたその山の傷口に、真黒に群がっていたハエ共の何と気味の悪い光景だったことか。又脳底骨折で重体の学生を背負いおろしていたとき、血の臭いを臭ぎつけてうるさくつきまとうハエの群の羽音が今だに耳底にこびりついてはなれない。

このほかキャンプサイトの時悩まされるブユの群とか、ロッククライミングの最中、顔にまつわるハナアブの類など登山に直接関係の深い昆虫もあるが、紙数の都合上ほかの機会にゆずりたい。最後につけ加えたいことは、前述の高山性昆虫が近年目にみえてその数を激減している傾向であろう。これは自然条件にもよるが、心ない採集家の乱獲によるところが実に大きい。この人達の無分別な採集が氷河の昔から生命を保ちつづけてきた彼等を絶滅の淵に追いやっているのである。前に紹介したT氏はこのことに心を痛め、殺生をタブーとし標本の類を畜えないのを信条とされている。研究の為止むを得ず採集しても観察が終れば、又もとのフィールドへ放してやるという。本当に心温まる話で、採集屋に瓜のアカでも煎じて飲ませたい程である。殊に最近では電源開発工事や登山路の改修などで虫達の楽園は狭められ、その棲家はうばわれているのに乱獲の追い打ちをかけるなどとは全く許しがたい行為であろう。今后少くも高山蝶類は天然記念物並に監視し保護されなければならない。

(山博学芸員・北極島商店)

残雪の不帰岳

北沢昭一郎

「メシダゾー」の声に目をさます。時計は3時
を少し過ぎていた。

シュラフの中でそのぬくもりと、スベアの快適
な音をしばらく楽しみながら今日の山行を思う。
熱い紅茶と、パンをそうそうに流しこみテントの
外に出た。冷い風が気持ちいい。

身にまつわりついた眠気がいっぺんにふっとんだ
夜明けに近い東の空、西の空、剣の上に残月が怪
しく輝いていた。

天気は上々躍る心でアイゼンバンドを締める。
三峯A尾根、一峯尾根、二峯甲南ルートに入る各
パーティーは出発の遅い不帰岳縦走パーティーの激働
の中、唐松沢を下る。アイゼンが面白い程良く

— X — X —

A尾根を単独登攀して「不帰東面はいいんね、来
年の五月に一諾にやりましょや」とIが言って来たのは
昨年の八月だった。その時は二人で二峯独標ルートをや
ろうと楽しみにしていた。それが今年、会の行事として
不帰岳東面をやることになり、Iはチーフリーダーに私
はサブとなり二人でパーティーを組む事が出来なくなった
新人の多い不帰岳縦走パーティーのリーダーを自分から買
って出たIは我々をうらやましそうな顔で見送ってくれ
た。

— X — X —

4時30分「国境後線で合いましょう」の合い言葉を交し
ながら、Bルンゼ出合でA尾根に入る。NとTに別れた
頃は、唐松沢の区切られた細長い空は紅に染っていた。
一、二峯間ルンゼ出合に着いた時、ルンゼは朝陽がいっ
ぱいだった。早いとこ尾根に取り付かぬえといやらしい
のが落ちて来るぞとルンゼを登り出した。
急斜面の下降でひざが笑った後の登りはピッチも思うよ
うに上がらず、甲南ルンゼ出合に着いた時はやれやれだ
った。一本立てる。紅茶がのどをうるおしうまい。
一峯パーティーのHとUは既にルンゼを三分の一も登って
いた。「やってさん達かせくな」「そうだね」とWはク
ラッカーをほおぼりながら言った。
「Hサーガンバッテ」のエールに「ハッタオスゾー」と
返って来た。我が友、頼もしきかな健在なりだ。ひとと
きWと苦笑した。

— X — X —

甲南ルンゼは、上部三角形と下部三角形の両岩壁の
間に、無気味に聳えている感じだった。コルの上に岩に
ふちどられて小さく見える真青な空だけがこのルンゼ唯
一の明るさでもあり、我々の希望でもあった。



白馬三山を望みながら

— X — X —

ザイルは結ばれた。2人は1つの目的に向かって結ばれた
のだ。

ワンピッチは、ワンアット、タイムでクレヴァスとなっ
た。5米程の雪壁を登る。

汗ばんだ顔にカッティングした雪が降りかかり気持ちいい。
30米一杯でバケツを作り、ピッケルをトップまで打ちこ
みビレーする。「上ってこい」の声に力のこもった声で
「お願いします」とWが行動を始める。

お互いの血の通った真赤なナイロンザイルがスルスルと雪
の上を走る。

「ヒューン」頭をかすめる落石、いよいよやらしいの
がやって来た。我々の居る処は逃げ場のない天国へ通ず
る雪の階段だ。こんな処に長居は無用、早くコルに出な
ければとコンテナスで、アイスクラフトを発揮してが
んばる。

股の下から見えるHとUは一峯尾根に出て休んでいた。
さかんにエールを送って来る。「ガンバレー半分だぞ」
急勾配のルンゼでもたかが二百米だ30分もすればコルに
出るだろうと考えていたが、半分だぞ、の声を聞いた時
甲南ルンゼに入ってから時間はもう1時間に近かった。
コルの上の空の大きさには変わりなかった。

粘り強く行こう。

最後のピッチは雪と親しく顔をすり合わせての登攀だっ
た。

空が大きく開け、八方尾根が、唐松岳が我等のBC、色鮮
やかなテント3張り、そして仲間の居るA尾根、いた
いたP2の上のテラスに休んでいる。おもわず叫ぶ。

しばらくエールの交換が続きお互いの健斗をたたえる。感

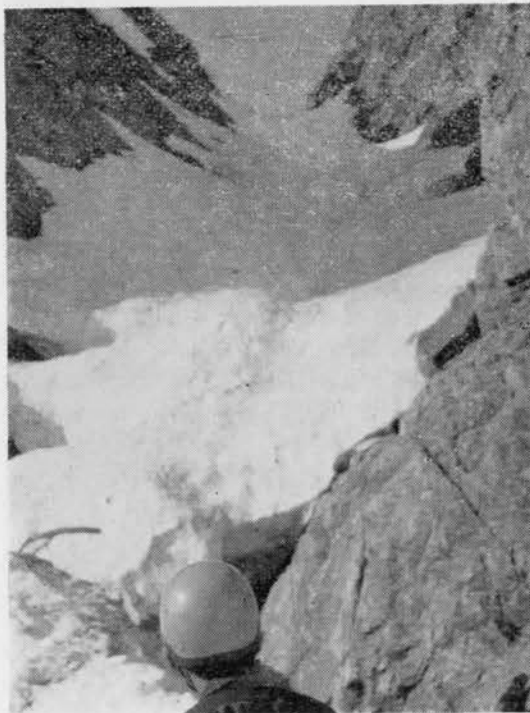
動はめいめいによって違っていたかもしれないが、我々の興奮は一つになって、谷にこたました。

アイゼンを取り、ソーセージ、クラッカー、干しブドウと腹につめる。一服つけながら唐松岳が、不帰の山稜が日の光を浴びているのを2人は見ている。そしてひどく孤独感にひたった。しかし幸福だった。

— × — × —

十米程のバンドを左に前進して先蹤者達がどんなコースをとったか、岩場を調べたが山の標識は何もなかった。浮石の多い岩場と不安定に岩の上の上のつて今にも落ちてきそうなスノーブロックと時々いやらしい音をたてて落ちてくる石をつくづく眺めた。

「あのブロックが落ちて来ればいちころだな」とWに言いながら、気持ちよく入るビレーピンを打ちこむ。ワンピッチ目は、上部ブロックが落ちてくれば完全に通路となる岩場を登る。ルートはここしかなかった。さすがに不安だったがちうちよはしなかった。北峰がすぐ身近かに尊大な姿で、かよわい虫けら同様に岩場にへばりついている我々を軽蔑の目で注視しているように見えた。なんとかあの横柄な山頂を足下に踏んまえてその虚勢を挫かねば。しかし、そのすばらしい瞬間を思いながらも、居心地の良い場所に達しなければと急いだ。スラブでの4ピッチは落石とブロックになやまされたが、快適なバランスクライミングの連続だった。



甲南ルートにて

上部三角形岩壁よりのリッジに着いた時は一時間を経過していた。

A尾根を見ると、TとNは相変わらず先程のテラスで休んでいる。「長く休んでいるね」とWがゼルプストバンドを締め直しながら言った。「野郎共のことだ楽しみ楽しみやっているさ」と私はカメラのファインダーをのぞいた。二峯正面壁のブロックが不安定に岩の上ののっかっている「あれさえ落ちたらなー」「今日は落ちねえかい」「知っているのは山の神だけさ、落ちたら明日は南峯ルンゼをつめ正面壁で快適なロッククライミングをやるがー」と残念そうに正面壁を見つめながら私は言った

— × — × —

二峯とのジャンクションに出た時真先き眺めたのは一峯尾根だった。HとUは見えなかった。

一峯頂上には黒い人間がうようよしている感じだった。「1人2人—9人」HとUは登頂したか、早えなー「ヤホー」と黄色い声がー二峯間ルンゼを越えて来たこちらからもドスのきいた声で返す。ルンゼはしばらくこだまのるっぽとなった。

一・二峯間ルンゼ側にすっぱりと落ち、北峯ルンゼ側に雪底を出したスノーリッジを慎重に登る。

第一岩峯を左に巻き、第二岩峯を直登しての登攀は、右に白馬三山、左に唐松、五竜を眺めながらでまったくすばらしく、散歩の気分だった。テラスに着いた。

北峯も真近かだ、一本立てる。縦走パーティーもそろそろ上に来るころだ。「うまいものは皆んな食わなきゃ、連中にたかられるじ」とWはもうミカンのカンズメを切り出していた。私も同感。

ミカン汁の甘さが口の中にしみてうまい。「明日も天気持つぞ」と晴れ上がった初夏の空を見上げながら言うと「明日も降らなきゃもうけもんだがね」「晴れたら二峯西面でパーティーを組むことになっているが、自信あるかい」とWの顔をのぞきこむと、彼は三ツ道具をしまう手をやすめて真黒に日にやけた顔に白い歯を見せ、はにかんだエミを浮かべるだけだった。北峯でしきりと早く上って来いとさわぎ出した。「今行くでまってるー」

— × — × —

「そこを左に巻いて次を右に……」とアドバイスする仲間の注視の中での登攀は少し低抗を感じあまり愉快じゃなかった。仲間の気持はありがたいが、やはり自分でルートをきり開いて静かに登りたい。

最後の岩稜を登り、剣を見た時は、もう登るものがないという安心の気持だった。Wを見ると、あたりを見廻しながら心の底からわき起る喜びに相好をくずしていた。二人は手をにぎり合いながら登頂の喜びにひたった。それは他の仲間と握手するたびに一層大きなものとなった。

(大町山の会)

目 ン 物

……信濃のわらべ歌小考(2)……

福 沢 武 一

目にはいった塵埃の名称が南信では特殊である。上伊那ではメモノ。目物、——目にはいった物の意。下伊那までいくと、メンモノと変っている。これは「目ノ物」で、同根語。

目のゴミは小さくても気になることおびたしい。そこで、これを取り除く唱えが生れた。当の下伊那では、メシモノ、メシモノ、出ておいで。(熊谷元一氏「ふるさとの唄」)

メンモノ、メンモノ、三度つばはいたら出ておいで。

(牧内武司氏「下伊那郷土民謡集」)

メシモノはメンモノの誤記。または、誤植。メモノからの紛れではないらしい。とにかく、この二つの唱えはまこと物腰が柔かい。熊谷氏も注記する、——三度つばをはきながら唱える、と。これはなにのまじないだろう。口先では下手にでて願ひ上げておき、実は唾棄するみたいなしぐさではある。

牧内氏は「でておいで」を「掃溜へ行け」と転調した形も報ずる。つばをはくようなところとして掃溜(ゴミ捨場)がもちだされた。一方、目のゴミのいくべき掃溜をもちだしたからこそつばをはくことになったともいえる。どっちが先か?……僕は後者に加担する。なぜなら——この方には類縁をもつ唱えがあまりにも多い。

じじいとばばあ、ゴミザリではきだせ。しよいだせ。

これは上伊那中部の古い唱え。ゴミザリは熊手。それは高砂の爺婆になくてならないもの。その縁故で両者が登場した。はきだし、しよいだして捨てる場所は掃溜その意味で牧内氏報ずるところの唱えに無縁ではない。ついでにいうと、上記のように唱え、そこで当の目を吹いて、フーフー、ヘーイーナ(もういいね)といい添えるそれはたいてい老人。相手はあどけない子供。こんなことで目のゴミが吹き払われてくれればいいが、さて…。

これに一番近い唱えは東筑摩郡奈川に拾われている。県外にも酷似のものがある。

眼のごみ、ちっさとはばさと、おれの目んなけ、こまざれを、はって来てかき出せ。(「木曾民謡集」奈川)

おん爺おん婆、熊手もってきて、掻き出せ、掻き出せ(「伝承童謡集成」6 静岡)

爺婆と熊手が大幅に共演する。ハッテは——その原義はともかくも、目の中へ爺婆が熊手をたずさえてはいるのであって、これはすでに妖精かなにかの爺婆だ。

その次に近いのは北安曇郡の番になる。

おれの目へ何はいった。爺と婆と杖ついて鼻へ行け。

(「北安曇郡郷土誌稿」4)

ここにも爺婆が登場する。熊手はもうない。代って、

老人にはなくてはならない杖になる。杖をついていく所は、奇妙なことに、ここでは鼻なのだ。思うに、その鼻は顔の中では山である。老人たちが山へ登るには益々杖が必要になってくる。……こう解釈すると、鼻が持ちだされても不思議はない。ただし、メモノと鼻との関係は必ずしもついていない。ひょっとすると、山は掃溜と同じく、不要なもの、けがれたものを捨てる場所なのだ捨てられたのは娯捨山の老婆ばかりではないことになるその裏づけに次の唱えを援用する。

眼物、眼物、向う山へ飛うでいけ……。 (「伝承童謡集成」6 高知)

ちちんぶいぶい、遠の山へぶい。(同書 栃木)

ちんぶんかんぶん、くまざらはらって、大平山へ吹くとべ。(同上)

遠い四国でも、目のゴミをメモノといっているのは面白い。栃木の方は、唱え出しの音が実に愉快。ブイといい、吹とべといっているところ、老人が口をとがらせて吹いてやっているはず。上伊那の例が思いあわされるそうした例を県外から一、二ひろうと、

地蔵様、おれのマナグ(目)さ埃が入えた。吹っ飛ばして呉らせえ。ふう、ふう。(同書 山形)

ワラス(童、わたし)のまなこさ埃はえった。爺さと婆さとマカダンブリ(末詳)もって突き出せ。ふう、ふう。(同書 岩手)

爺さ婆さ、しゃくしもって吹いていけ。(同書 岐阜)

も一つ、僕のひそかに考えていることを語らせてもらいたい。それは、爺婆がしきりと使用されていることについて。ゴミのよしみで熊手がでた。熊手のよしみで爺婆がでた。そう考える一方、この逆に、ゴミを爺婆のものにならえたのではないか?……というのと、老人たちにお気の毒だけれど、ゴミをいやしめて爺婆としたかと考える。そうした解を助ける例は、

じじ、ばば、出る。(同書 群馬)

もしこの解が許されるならば、さきにあげた北安曇郡の場合がきわめてすっきりと受けとられる。それを次に示すと、

おれの目へ何かがはいった、それはゴミ——爺と婆だ爺と婆なら杖でもついて鼻(山)へ行ってしまうがいい

最後に一言。かりに以上のようなたとする。と、はじめゴミを爺婆が同一だったのが、いつのまにか別々になり爺婆がゴミをとりのぞく人物にしたてられていった。そんなことが実際に起っている実証のためにも更に多くの類唱を拾う必要がある。とくに希望したいのは、まず手近な県内を当てほしい。一人、二人の力にはあまる。同好同学の士によびかけたい。(屋代東高校教諭)

センダイムシクイ

長 沢 修 介

木々の芽が吹き始める頃になるといつも沢山の小鳥達がやって来て何処に行っても小鳥の歌声が美しく響いている。センダイムシクイはこれ等の春にやって来る鳥達の中でも早い方で木の芽がわずかにのぞき始める頃にやって来る。毎年ウグイスの初鳴きを聞いて少したつと夏鳥では一番早くあの特徴のあるチョコ、チョコ、ジーの鳴き声を聞かせてくれる。そしてオオルリやキビタキ等の主な夏鳥の渡って来る頃には自分のテリトリーを決めてそれを守って早朝から歌っている。ウグイス科の中でも小形の方で本邦にいる鳥の中では最少の部類に入る。他のウグイス科の鳥は叢に生活するものが多いがセンダイムシクイは落葉樹林に生活するものが多い。体を活潑に動かして梢や樹間を飛び廻りあまり群ることはない。巣は地上の崖地や草の根元等に作り側面に入りのある



球形の巣である。

卵は純白色で斑紋はなく5~6月にかけて4~6個の卵を産む。又センダイムシクイはホトトギス科のツツドリに似ていてもあつてこの鳥の小さな巣からあの大きなツツドリが成長することがたまたまある。

ノ ジ コ

太陽は木木の若葉を通して一つばいに降りそそぎその下には沢山の草花が色とりどりに咲き競っている。初夏はヒナ鳥の季節、何処に行っても嘴の黄色い奴がいっぱい羽振りのいいのやらまだよちよち歩きなのに一人前の顔をしたのやら。皆親鳥の心配を外に始めて見る世界を我者顔に歩きまわっている。

このヒナも今日巣立したばかりでまだ2mと飛ぶことができずうぶ毛が頭のあたりに一つばいに残っているくせに枝から枝へと飛ぶのが面白くて下枝から上へ上へと飛びうつることに懸命だ。親鳥は子供を守るのと餌を運ぶのに急がしく目まぐるしく飛び廻る。ヒナは食べることに飽くことを知らず親鳥の顔さえ見れば黄色い嘴をいっぱい開いて餌をねだる。

ノジコは当地では漂鳥というよりはむしろ夏鳥の部類に入り4月下旬頃にやって来て山地の雑木林に棲息する。当地では近種のアオジはほとんど見られないがアオジは至る所でその美声を聞かせてくれる。灌木の樹枝上に椀形の巣を作り帯青灰白色の地に暗褐色の雲状又は点のある卵を3~5ヶ産む。夏季は昆虫を食し秋冬は草の種子を食べる。美声のため飼育する人も多い。

資 料 寄 贈

山毛榉林No58、広島山の会、かもしかNo19、敦賀山の会、O.M.C No137、奥多摩山岳会、千葉生物誌No10~

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館



3.4、千葉生物学会、博物館だよりNo7、小樽市博物館自然科学と博物館No28~1~2、国立自然科学博物館四つばし61~4、大阪市立電気科学館、稜友、東京北稜山岳会、国立公園No137、国立公園協会、九州の山、立石敏雄、山とスキーの会々報No135、朝日新聞東京本社山とスキーの会、峠No2~2、2~3、広島山稜会 小六教育技術、渡辺定三、登高、東京登高会、ハイカーNo67、山と溪谷社、箕面の生物、藤下英也、立教大学博物館研究 Mouselon No7、立教大学博物館学講座、山嶺No373、東京野歩路会、葛城No132、泉州山岳会、5月会報、京都趣味登山会、京都山岳、京都山岳会、岳友No59、岳友クラブ、わらじNo4~42、わらじの仲間山毛榉林No59、広島山の会、山辺No16,17、横須賀登高会 (敬称略)

山と博物館 第6巻第7号 1961年6月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上中町
信州印刷大町工場